

きこりの一家^{いっか}

山の麓にある一軒のあばらやに、きこりの夫婦と三人の子供が暮らしていました。^{いえ}家はとても貧しく、食べ物も満足に買えません。その上あたりでは、恐ろしい流行り病が広がっていました。子供のみがかかり、七日の間^{なの か あいだ}高熱に浮かされた挙句大量の血液を噴いて死に至るといわれるその病に、三人の子供たちもかかっていました。

床に敷いた布団に横たわり、苦しそうに浅く呼吸をしている子供たち。その顔を、窓から注ぎ込む月の光が青白く照らしています。暗い面持ちで視線を落としていたきこりは、^{いえ}家の戸を叩かれる音で顔を上げました。

「ごめんください」

こんな夜分に一体誰だ、と訝しく思いつつも、きこりが軋む戸を開けてやると、暗がりには立っていたのは見知らぬ青年でした。細い体に大きな木箱を下げています。

「遅くにすみません。私は街で薬売りをしている者です。山へ薬の材料となる^{くさばな}草花を摘みに来たのですが、帰り道で迷ってしまいました。どうか一晩泊めてはいただけないでしょうか」

薬売り、と聞いて、きこりの心に嫌な記憶が蘇りました。なけなしのお金を握りしめ、流行り病の薬を売って欲しいと頼みに行った先で、きこりは薬売りから膝蹴りを食らわせられたのです。痛みに呻くさなか「馬鹿にしているのか」と怒鳴りつけてきた顔が頭の中に浮かび、思わず目の前の青年を睨みつけました。

「帰れ。俺は薬売りって連中が嫌いだ」

「そこを、なんとか……。私にはもう、歩く力も残されていないのです。夜明けまで休ませてくださるだけで十分ですから……。お願いします」

頭を下げながら縋るような声を出した青年に、ほんの少し同情する気持ちが生まれそうになったきこりでしたが、「いかん」と押さえ込みました。

「駄目だ、帰れ。うちに人を泊めてやる余裕はない」

野宿でもすればいいだろう、と言い捨て、きこりが戸を閉めようとしたその時。

「ねえ、とてもお困りのようだから、入っていただいたら？」

子供たちについていた奥さんが気遣うように声をかけてきました。

「しかし、こいつは俺たちを蔑んだあの野郎共と同業——」

「“この方”が私たちに何かひどいことをしたわけではないでしょう？」

きこりの返事を遮って立ち上がった奥さんは戸口までやってきて、俯いていた青年を中へ招いてしまいました。

「言っておくが、板の間を少し使わせてやるだけだぞ。食べ物も寝具もあんたにやれるものはないからな」

奥さんが「どうぞ」と言っているのに無理に追い出すわけにもいかず、きこりはしぶしぶと青年を部屋へ上げてやりました。

「まあまあ、あなた。そう邪険にしないでいいじゃありませんか」

きこりをやんわりと嗜めた奥さんが、青年の方へと向き直りました。

「狭いところですけど、どうぞゆっくりなさってくださいな。今、何かお食事を作ってまいりますね」

「あ、お構いなく……」

遠慮する青年に、にこりとして軽く頭を下げた奥さんがお勝手の方へと消えていきました。

その姿をため息まじりに見送ったきこりは、薄暗い室内に腰を下ろします。

「その辺に適当に座れ」

青年に向けて手で示したきこりでしたが、青年の目はそばで寝ている子供たちに釘付けになっているようでした。

「これは、流行り病ですか……」

持っていた木箱を板の間の隅に下ろした青年は、悲しげに眉を寄せています。

「ああ、そうだよ。あんたらはたくさん儲かって笑いが止まらないのかもしれないが」

フン、と鼻を鳴らしたきこりは、青年から子供たちへと視線を移しました。愛する家族は今もなお苦しんでいるというのに、何もしてやれない自分を齒痒く思うと同時に、緊急時に

必需品を高く売って法外な利益を得ている薬売りという存在が、一層憎らしく思えてきました。

そんなきこりの耳に、引き出しを開けるような音が届きました。目を向けると、板の間に置いた木箱の一段目から青年が何かを取り出すのが見えました。

「これは流行り病の薬です。お代は結構ですから、どうかお子さんたちに飲ませてあげてください」

どうやらあの木箱は薬籠^{やくろう}のようです。きこりのそばまで寄ってきた青年が手にしていたのは三つの小さな瓶でした。中には透明な液体がなみなみと入れられています。差し出されたそれらを見て、きこりは目を丸くしました。

そしてすぐに、青年の真意をはかろうとしました。

(……ははあ。さては、あとで薬代をふんだくるつもりだな)

ただ、きこりにとってはまず子供たちが助かるということが、何より大事なことでした。

行灯^{あんどん}に火を灯したきこりは、青年の手から瓶を受け取ると、中の液体を吸飲みに入れ、三人の子供たちに飲ませてやりました。

「朝になって目覚める頃には、皆すっかり元気になっていますよ」

青年に声をかけられたきこりは、彼の方へ向き直りました。再び眠りについた子供たちを見る青年の眼差しはとても優しいものでした。

「それで、俺はあんたに何を差し出したらいいいんだ？ 身ぐるみ剥いだところで大した値打ちにもならんぞ」

青年の態度にどことなく真心を感じつつも、きこりは尋ねました。

「いえ、本当にお代は結構です」

そう言うと青年は板の間の隅の方へ戻っていきました。

「……しかし、薬一つ仕入れるのにも金がかかるんだろう」

どうにも街で出会った他の薬売りたちとは違うように思えて、少しだけ心を開きかけたきこりは、青年の隣に腰を下ろしました。

「確かに、生計を立てるための商いである以上、利益は出さなければなりません……。これは泊めていただいたお礼の気持ちですから」

目を細めて答えた青年は、さらに言葉を続けます。

「それに、私の売っている薬は、私の師である薬師^{くすりし}の先生が作ったものなのです。先生は常日頃から助け合いの心を持って行動することを説かれています。困っていた私を助けてくださったあなたへ、お礼として渡したと話せば許してくださるでしょう」

青年の話を聞いて、『そう言えば』ときこりは気づきました。確か戸を開けた時、彼は『山へ薬の材料となる草花を摘みに来た』と話していたな、と。

「あなた、薬師の卵なのか」

「はい。住み込みで薬学の勉強をしながら、薬を売って俸給を得ています」

なかなか殊勝な青年ではないか、ときこりは思い始めていました。

「そりゃあさぞかし、親御さんも誇らしいだろう」

きこりは褒めたつもりでしたが、青年の表情はふっと曇ってしまいました。

「……親は……、おりません。先生が私の親代わりです」

翳^{かげ}のある声で答えた青年に、きこりはどきりしました。

「亡くなったのか」

「いえ……、生きています、思います」

言い淀む青年の様子を見て、きこりは考えを巡らせました。

「もしやあなた……、親に、捨てられた、のか？」

しばしの間をおいて青年が「はい」と答えました。その言葉を聞いて、きこりの心は落ち着きをなくしました。

「……なにか？」

「い、いや」

視線をあちこちに動かしたきこりは、やがて意を決したように口を開きます。

「実はな、俺は昔、まだ幼い息子を一人……死なせたことがあるんだ」

暗い面持ちできこりは語り出しました。

「あの頃は妻と息子の三人暮らしだった。生活は今よりもっと苦しくて、親子三人共倒れになるかの瀬戸際だった。食いづちを減らすことを考えた俺は、飲めばたちまち息の根が止まるという毒草を煮出して、竹筒^{たけづつ}に入れて、息子を背負って山に入ったんだ。奥深くまで連れて行って、煮汁を飲ませるつもりだった」

膝の上に置かれているきこりの手が、ぎゅっと握られました。

「あいつも……、幼いながらにいつもと違う空気を感じとったんだろうな。そのうち、通り過ぎる木々の枝を折って、落とし始めたんだ。山に置き去りにされても帰ってこられるようにそうしているんだと、俺は思った」

「……違ったのですか」

きこりは弱々しく頷きました。

「枝を落とすあいつに尋ねたんだ。『何をしているんだ』と。あいつは優しい声でこう答えた。『お父ちゃんが一人で山を下りるのに、迷ったりしたら大変でしょう』ってな」

その時の光景がはっきりと頭に蘇ったきこりの目が、涙で潤みます。少しの沈黙の後で、青年の問いかけが耳に届きました。

「それであなたは、どうなさったのですか」

「言っただろう。『死なせた』と。俺はあいつをそのまま置き去りにして山を駆け下りた。御伽噺なんかじゃ心を改めて連れて帰るのが筋なんだろうが、現実はそうはいかない。連れて帰れるなら、初めから愛する息子を手に掛けようなど、考えもしない」

落とされていたきこりの視線が青年の方に向けられました。

「軽蔑するかね」

「……いいえ。僕はあなたの話に、親の情を感じましたよ。生き延びてくれることを信じて、息子さんに毒を飲まसानかったのですから」

きこりは力をなくしたように、首を左右に振ります。

「違うな。俺はただ、手に掛けることから逃げ出したんだ。子供一人であの山を下りるなんてできるはずがないとわかっていながら、置き去りにした。『死なせた』んだ。事実、息子は戻ってこなかった。毒で死なせてやった方が苦しめずに済んだかもしれないと思うと、俺は……」

きこりが唇を噛み締めると、青年はなぐさめるようにその背を軽くなでました。

「息子さんはきっと、あなたを恨んでなどいないと思いますよ」

青年の言葉を聞いて、きこりは複雑な心境になりました。親に捨てられたというこの青年に息子の話をしたのは、彼の口から優しい言葉をかけられることで救われたかったのか、それとも息子に代わって詰って欲しかったのか、自分でもわからなくなっていました。

きこりも青年も黙ったまま、しばらくしいんとしていた室内に、足音が近づいてきました。

「どうもお待ち遠様。……あら、あなた。どうかなさったの」

姿を見せた奥さんが、目頭を押さえていたきこりに向かって尋ねました。

「ああ、いや。ちょっとな」

きこりは慌てて手を離し、誤魔化すように微苦笑を浮かべました。そんなきこりの様子を特に問いただすことはせず、奥さんが青年の前に膝をつきました。その手にはお椀がのせられたお盆を持っています。

「こんなものしかありませんが、どうぞ召し上がってくださいな」

差し出されたお椀には、汁の中にわずかばかりの豆と米が入っていました。

「ありがとうございます」

受け取ったお椀を両手で大事そうに包み込んだ青年がふわりと笑いました。その唇がお椀のふちにつけられます。

中の汁を一口飲み下した青年の手が、一瞬震えました。お椀が滑り落ち、派手な音を立てて床に転がりました。間もなく、青年の体も倒れていきます。

「ど、どうした?!」

「んっ……、んふっ……」

抱きとめたきこりが問いかけても、青年の口からは奇妙な息遣いが漏れるばかりでした。先ほどまで生き生きとしていた双眸は、すでに焦点が合っていません。

「お……、おお……う……、おふっ……」

必死に何かを訴えるように発せられた声も、舌がもつれたようにはっきりせず、聞き取ることができません。

「オッ」

低く潰れた音と同時に、青年の体が大きく仰け反りました。

「オッ オッ ……オッ エッ ツ……オッ エッ エッ ……ヴェッ」

ひときわ大きく呻いた青年は、黒目をぐるりと反転させ、やがて動かなくなりました。行灯の光に照らされたその顔色は、ほんのりと橙に染まっているせいか、まだ生きているような色に見えました。

「お、おい」

あまりの出来事に茫然としていたきこりでしたが、すぐに奥さんの様子がおかしいことに気づきました。青年が置いていた薬籠の中を、あさり始めていたのです。

「お前、まさか……」

きこりが震える声で奥さんに投げかけました。

「ええ。私が、豆粥に毒草の汁を入れました」

手を止めた奥さんがきこりの方へ顔を向けました。気丈に振る舞おうとしているのか、その表情は傍目には落ち着いているように見えました。

「本当は、子供たちに飲ませるつもりだったんです。長い間、ただ苦しめておくしかできないのなら、せめて一思いに逝かせてあげようと……、そう思っていました。でも……戸口に立つその人を見たときに、下げている薬籠が目に入って……」

言葉を詰まらせた奥さんに、きこりもまた声を失いました。

（なんて、ことを……）

初めから彼女は、青年の命とともに薬を奪うことを考え、家へ上げたのか、と、きこりは空恐ろしくなりました。再び薬籠の中に手を入れて、片っぱしから瓶や包みを取り出していく奥さんに、『薬はもう飲ませてもらったのだ』と説明することもできず、ただ口をぱくぱくと動かすばかりでした。

そうしている間に、全部で三段あった引き出しの中身が、全て床に並べられました。

「流行り病の薬はここにはないみたい。ねえ、あなた。ここにある薬を全部売って、お金に変えましょうよ。亡骸は山へ埋めてしまえばいいじゃありませんか」

そう言うと奥さんは、三段目の引き出しに入っていた白い封筒を手に取りました。薬の仕様書かもしれない、と呟きながら、封を開けて中身を引き抜き、書かれている文面を目で読み進めました。

「……あ、ああ。ああああああ……っ！」

悲鳴のような声を上げた奥さんの指から、書状がするりと落ちました。その文面が、そばにいたきこりの目にも飛び込んできました。

『お父さん お母さん 私を覚えているでしょうか

私は あなたたちの間に生まれ この家で育てられていた 息子のハルトです

面と向かって名乗るべきか悩んだ末　まずは書簡にて挨拶をすることに決めました

十年前のあの日　お父さんに背負われて　山へ連れて行かれたあの時のことは　今でも鮮明に思い出すことができます

私を山肌を下ろしたお父さん　あなたの顔は　見ていられないほどの哀しみに溢れていましたね

あなたが私を疎んでこんなことをするのは決してないと　山を下るあなたの背を　追いかけてはならないのだと　私はその場にうずくまっていた

そうして偶然出会ったのが　薬の材料となる草花を摘みに来ていた　薬師のシン先生だったのです

先生に保護され　大切に育てられてきた私は今　先生のもとで薬学を学んでいます

一年前からようやく　俸給を得るための仕事ができるようにもなりました

本当は　一人前の薬師となってから　顔を見せるつもりでいたのです

それをこうして早めたのは　二人が流行り病の薬を求め　街へやってきたという噂を耳にしたからでした

まだ幼い兄弟たちが病に苦しめられ　死に瀕しているかと思うと居ても立ってもいられず　迷い人を装って確かめることにしました

噂が本当ならば　兄弟たちは今頃　私が持参した薬で良くなっていることでしょう

この薬籠と薬は　貯めた俸給で先生から譲っていただいたものです

ここへ置いてゆきますので　どうか家計の足しにしてください

一人前の薬師となる頃には　お父さんお母さんを助け　支えることができるようになるでしょう

それまでどうか　お体をお大事に』

「おおおおおおおおおおおお！！」

月の明るい山の麓に、きこりの慟哭がいつまでも響き渡っていました。

【舞台設定】

お伽話然とした架空の世界。満十五歳以上は成人。『薬師』『薬売り』もこの世界独自の在り方をしている。

薬師・・・読みは『やくし』でも『くすし』でもなく『くすりし』。現代日本でいうところの『医者』と『薬剤師』と『製薬業』を合わせたような職業。高度な専門的能力を身につけた者だけに就くことができる

薬売り・・・薬の行商をしている人。申請をすれば誰でも就くことができる職業。きこりが街で出会った薬売りたちは、道徳に反するルートから手に入れたり仕入れたりした薬を、法外な料金で客に売りさばいている悪徳の者たち。多くの薬売りは善良だが、きこりはそれを知らない

【人物設定】

きこり

- ・年齢性別：三十代後半の男性
- ・容貌：無骨。切れ長のつり目
- ・体格：骨格はがっしりしているが満足に食事を摂ることができないため肉付きはあまりよくない

奥さん

- ・年齢性別：三十代後半の女性
- ・容貌：穏やか。たれ目
- ・体格：小柄で細身

薬師見習いの青年（ハルト）

- ・年齢性別：十五歳の男性（この世界に於いては成人を迎えたばかり）
- ・容貌：中性的。多くの人が見た瞬間に『この人は自分の敵ではない』と認識する様な甘い雰囲気
- ・体格：細身